淡河城跡発掘調査概要

1977

神戸市教育委員会

目　　次

1．位置と環境…… 3
2．調査概要…… 4

第1図　淡河城跡および周辺の城跡…… 2
第2図　淡河城跡トレンチ配置図…… 5
第3図　Aトレンチ平面図および断面層位図…… 6
第4図　Bトレンチ平面図および断面層位図…… 7
第5図　Cトレンチ平面図および断面層位図…… 8
第6図　Cトレンチ竪穴住居址…… 9

写　真　(1)　淡河城跡遠景……10
(2)　淡河城跡遠景……10
(3)　淡河城本丸跡……11
(4)　淡河城跡発掘予定地……11
(5)　Aトレンチ……12
(6)　Bトレンチ……12
(7)　Cトレンチ……13
(8)　淡河城下層・竪穴住居址……13
(9)　淡河城下層・竪穴住居址……14
(10)　近世石積……14

例　　言

本書は，神戸市教育委員会が，圃場整備事業にともなう神戸市北区淡河町淡河の埋蔵文化財発掘調査を実施したうち国庫補助事業に関する概要である。調査費用100万円のうち，国庫補助金50万円，県補助金25万円の補助を受けて調査を実施した。

調査は，神戸市教育委員会文化課学芸員宮本郁雄を現場主任として，昭和51年12月12日より12月25日まで実施した。調査にあたっては大阪城天守閣主任学芸員渡辺武氏，兵庫県立兵庫高等学校教諭北垣總一郎氏の協力を得た。また作業は地元の人々のお世話になった。

図面の整理は神戸大学工学部建築学専攻の大学院生および学生があたり，本書の作成は宮本が担当した。

発掘調査参加者

多淵敏樹・下田　勉・喜谷美宣・奥田哲通
宮本郁雄・浅岡俊夫・中村善則・丸山　潔
田端和仁・角谷政美・谷　邦子・大西久樹
沼口公男・渕上　崇・名幸潤一・野網早男

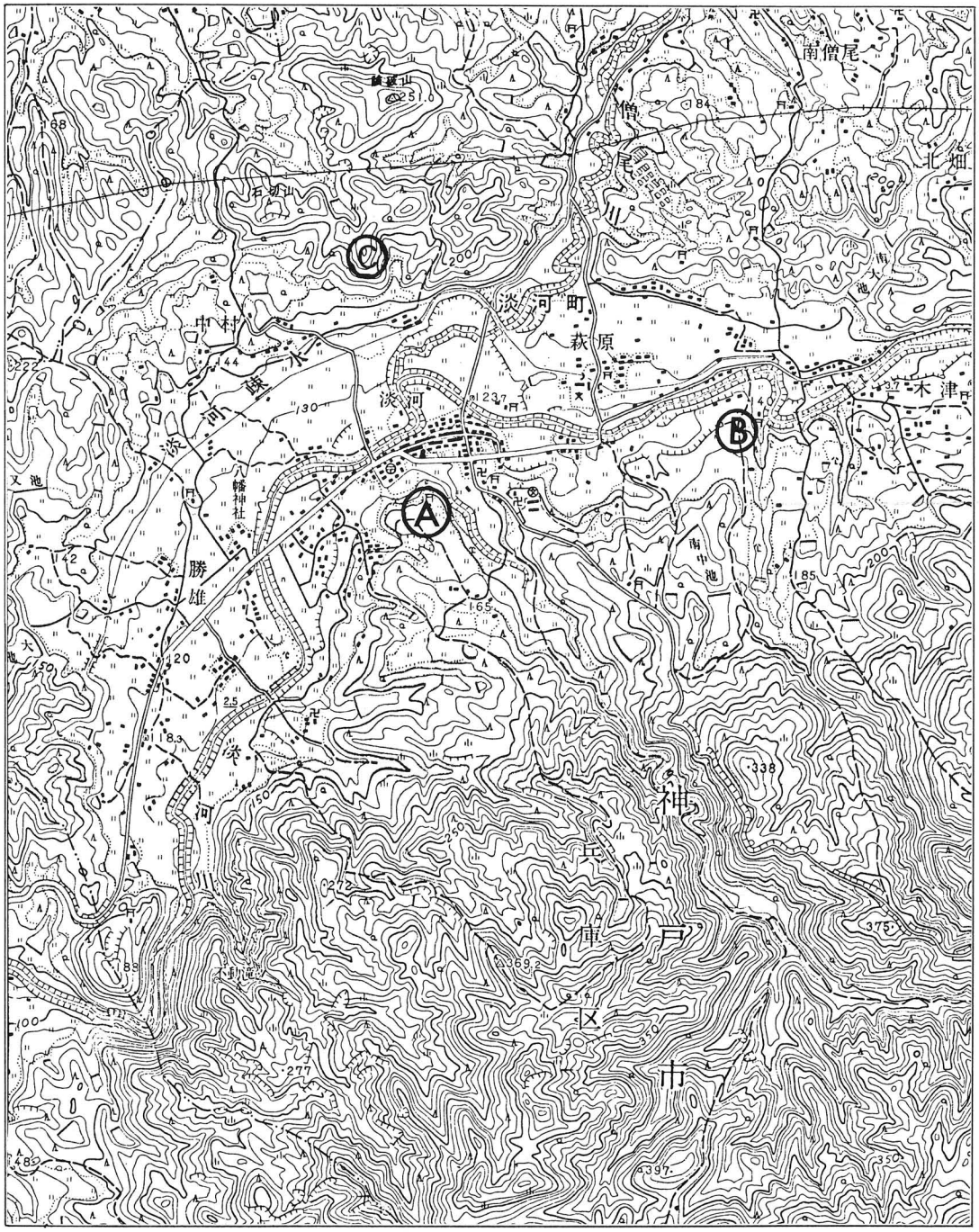


図１　淡河城跡および周辺の城跡
Ａは淡河城跡　Ｂは萩原城跡　Ｃは天正寺城跡

淡河城跡発掘調査概要

Ⅰ　位置と環境

所在地　神戸市北区淡河町淡河

淡河町はまわりを山に囲まれた，東西約４キロメートル，南北約600メートルの小盆地を形成し，中央部に淡河川が蛇行し，志染川から美嚢川，そして加古川へとそそいでいる。

現在県道三田―三木線の幹線道路が通っているが，近世も湯乃山街道として，伊丹～有馬～三木～姫路の裏西国街道として栄えている。当時，淡河には本陣があり，参勤交代の途中有馬で湯治し淡河の本陣に立寄っている。また現在，淡河町から北へは美嚢郡吉川町へまた南へは山田町への道があり，古くから交通の要衝として開けていた。

淡河町には，淡河城をはじめ，北側に天正寺城があり，東約１キロメートルの所に萩原城があり，小さい淡河盆地に城がかたまっていたことからみても，重要な地点であったことがうかがえる。

淡河城は丹生・帝釈山系の北麓にあり，台地が淡河町に舌状に突出した所に位置している。淡河城の東・西・北側は比高差30メートルもある崖の堅城であるが，南側は台地が張り出した部分とつながっている。ここから淡河盆地は一望のもとに見おろすことができる。この台地は現在田畑になっており，城の形状を残しているのは台地北東隅の本丸跡のみである。

淡河城跡は，北東隅50メートル四方が濠に囲まれた本丸跡と，東西約250メートル，南北約350メートルの範囲の城域と推定されている。

本丸跡を除く台地全面と，台地下西側の一部の田地が，昭和51年度に神戸市の単年度計画で，ほ場整備事業が施行されるにあたり，事前に神戸市農政局と協議した結果，城跡の範囲を確認調査することになった。

2．調査の概要

調査対象地にあたる西側や南側の一部は神戸市農政局が，淡河城跡発掘調査団に委託して調査が進められているため，今回は，城域の南限および東限と平坦面の一部を調査することにした。(図・2)

調査はまず，東限を調べるため，巾2メートルで，長さ30メートルのAトレンチを設定した。(図・3) トレンチ断面の1・2層は田の耕土および床土で3層に中世から近世にかけての陶磁器を含む層が見られた。またA－3トレンチは，東側の地山が約20センチメートル程高くなっていたが，遺構は発見されず，淡河城当時の構築物があったのかは不明である。またその他の遺構は何も検出されなかった。

続いてBトレンチを，巾2メートルで，長さ30メートルを設定した。(図・4) Bトレンチの断面もAトレンチと同じく，第3層中に，中世から近世にかけての陶磁器を多く含んでいる。また第4層中にも，須恵器を若干含んでいた。このトレンチも地山まで掘り下げたが遺構は検出されなかった。

つぎにCトレンチを1メートル巾で，30メートルの長さを設定し掘削した。(図・5) 掘削の結果，断面の層位については，他のトレンチとほぼ同じ層が見られた。第3層は，この台地全体に見られる層で，おそらく，淡河城廃城後，新田開発の時の整地層と考えられる。C－3トレンチにかなり厚く炭や焼土を含む層が5メートルの巾で見られた。これは淡河城の南限で柵跡等の構築物があり，秀吉勢によって焼き払われたのではないかと推定し，トレンチの両側10メートルの所にそれぞれ1メートル×10メートルのトレンチを設定した。しかし，C－4トレンチ，C－5トレンチからは，柵跡等の遺構は発見されなかった。このことから，焼土は，C－3トレンチを中心とする単独の遺構と考え拡張することにした。その結果，焼土は方形プランになり，住居址の可能性が非常に強くなった。精査の結果，一辺が南北約 6.5メートル，東西約6メートルのややいびつな隅丸方形住居址を検出した。住居址の直上から青磁片等が出土したため，淡河城築城前の中世頃の住居址ではないかとの推定で掘り始めた。

住居址は，各四辺に約1メートルのベッド状遺構が見られ，周囲外壁とベッド状遺構の一段下った所に溝が検出され，規模・形状等から播磨地方によく見られる弥生時代の住居址の可能性が強くなってきた。また住居址の南寄りに落ち込みがあり，住居址が乱れているが，底より土器片が出土し攪乱でないことがわかったが，この落

ち込みの性格は不明である。また，各四隅に柱穴が検出されたが，住居址のまわりは，すでにかなり削られていると思われ垂木の痕跡は確認されなかった。

住居址内からの出土遺物はほとんどないが，土器片数点が出土した。この土器の特徴から弥生時代最終末期から古墳時代初頭の時期の住居址という結論を得た。

また，台地の西側や北側に石垣が部分的に残っているが，鑑定の結果，これも新田開発の時に積まれた石垣と考えられた。

今回の調査から淡河城跡にかかわる遺構は確認されず，結局南限をつかむことはできなかった。これらから淡河城は，本丸跡を中心としたごく一部の施設を構築するくらいで，この台地全体が城域ではないと考えられる。

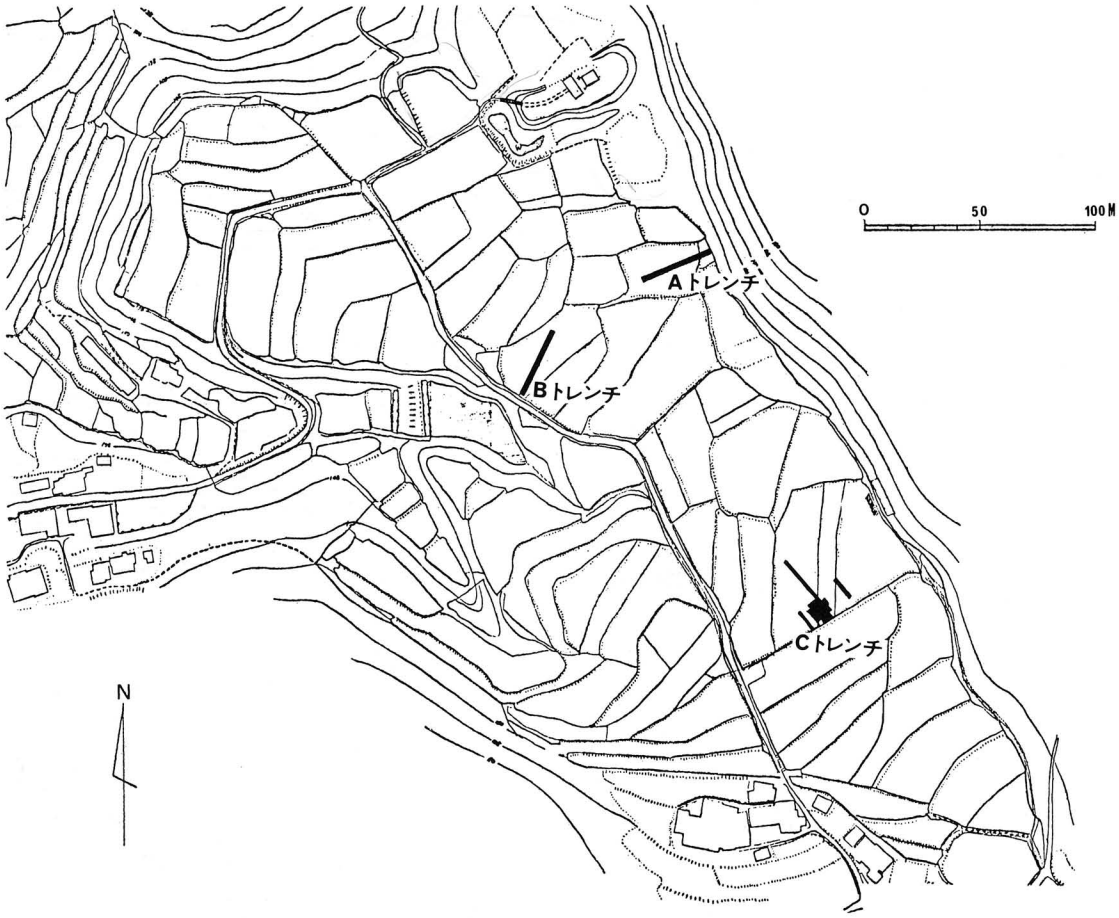


図2　淡河城跡トレンチ配置図

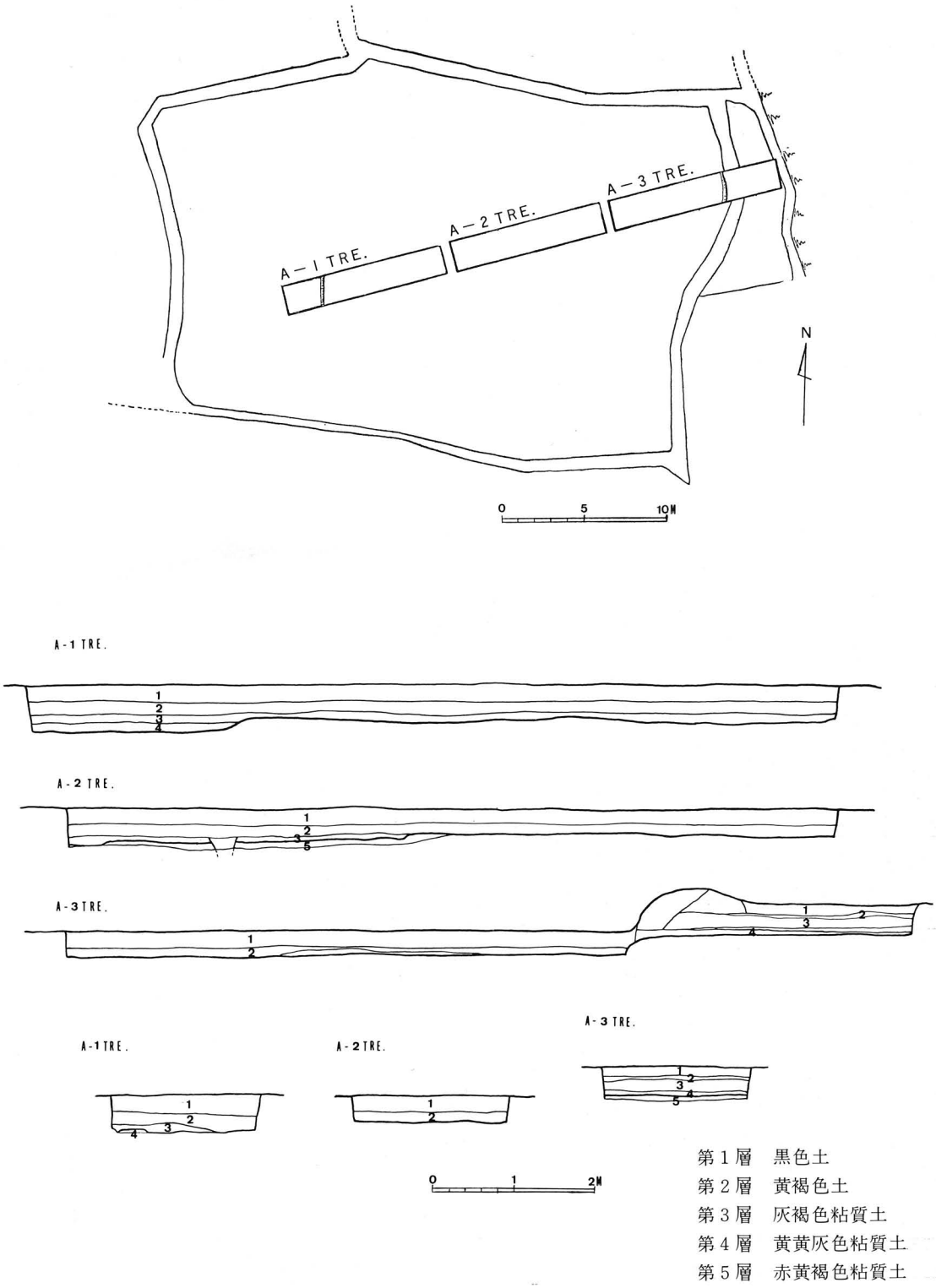
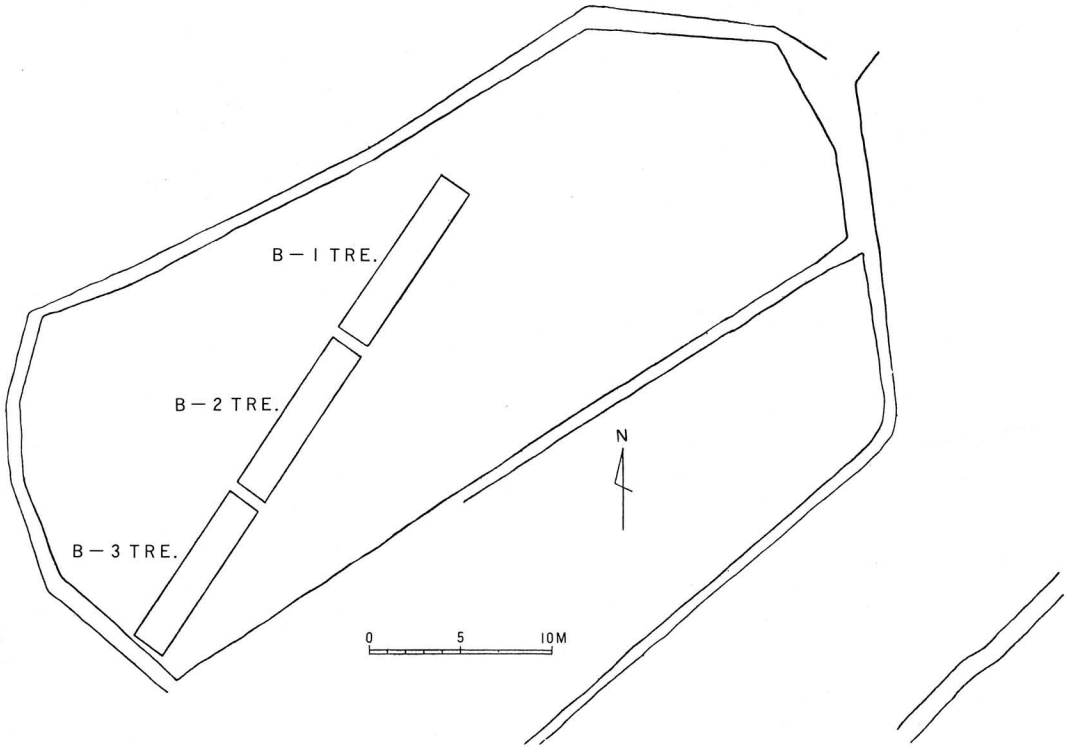
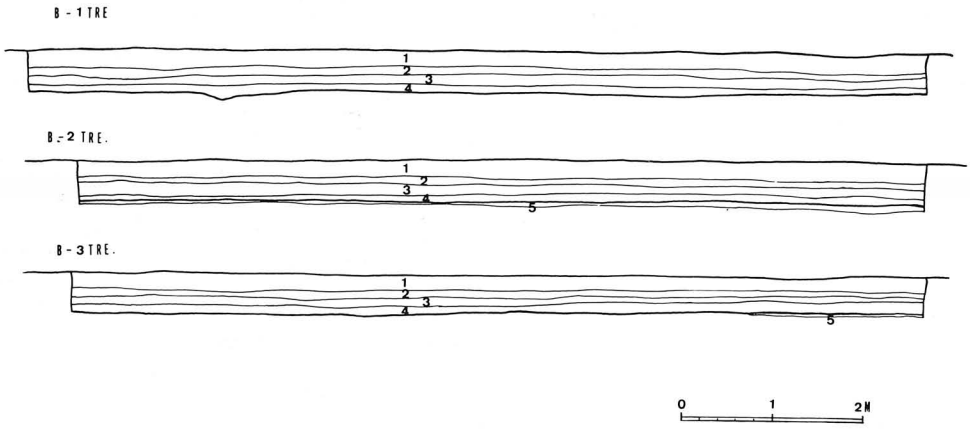


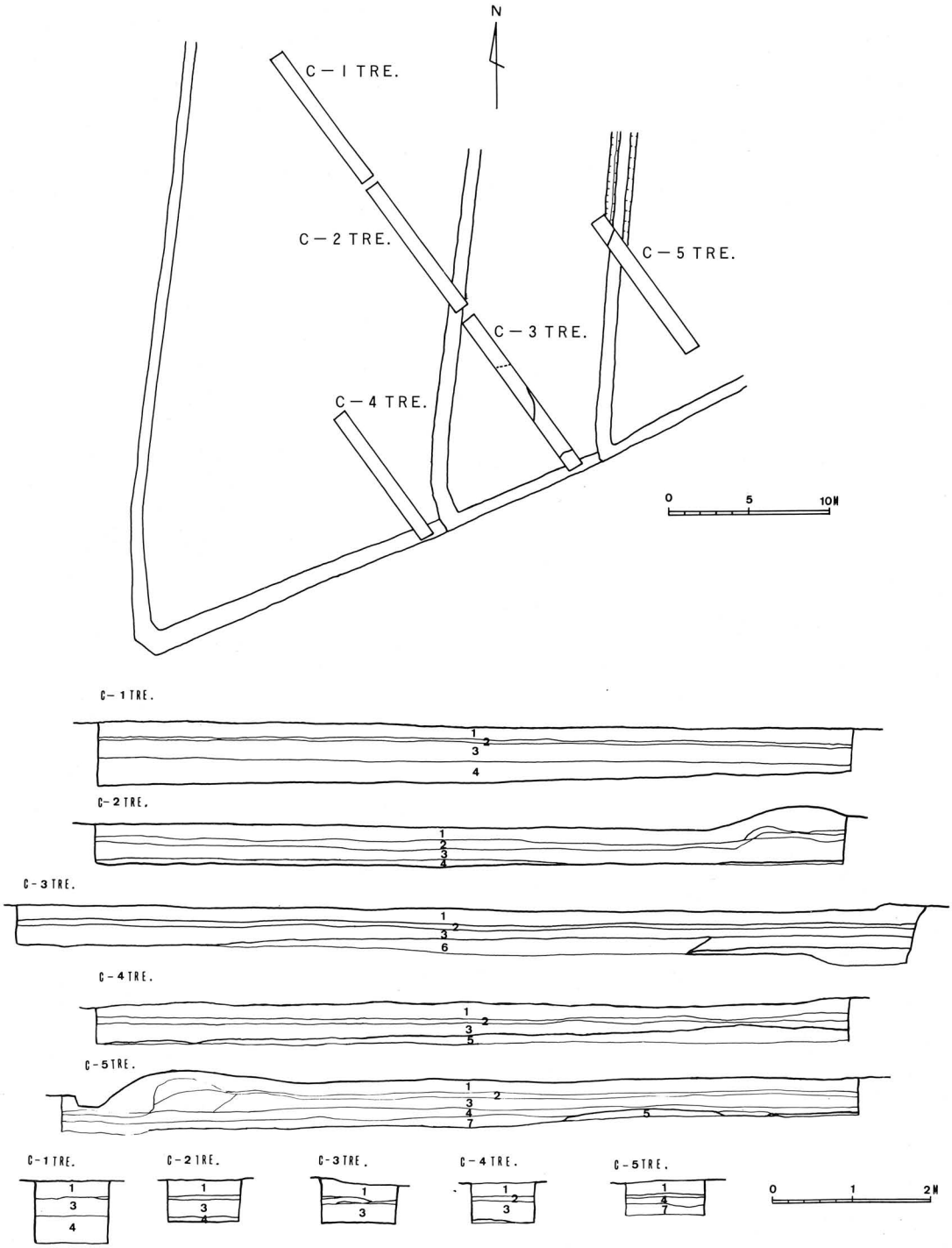
図３　Ａトレンチ平面図および断面層位図





第１層　黒色土
第２層　黄褐色土
第３層　灰褐色粘質土
第４層　黄黄灰色粘質土
第５層　赤黄褐色粘質土

図４　Ｂトレンチ平面図および断面層位図



第１層　黒色土
第２層　黄褐色土
第３層　灰褐色粘質土
第４層　黄黄灰色粘質土
第５層　赤黄褐色粘質土
第６層　黒褐色粘質土
第７層　暗灰褐色土

図５　Ｃトレンチ平面図および断面層位図

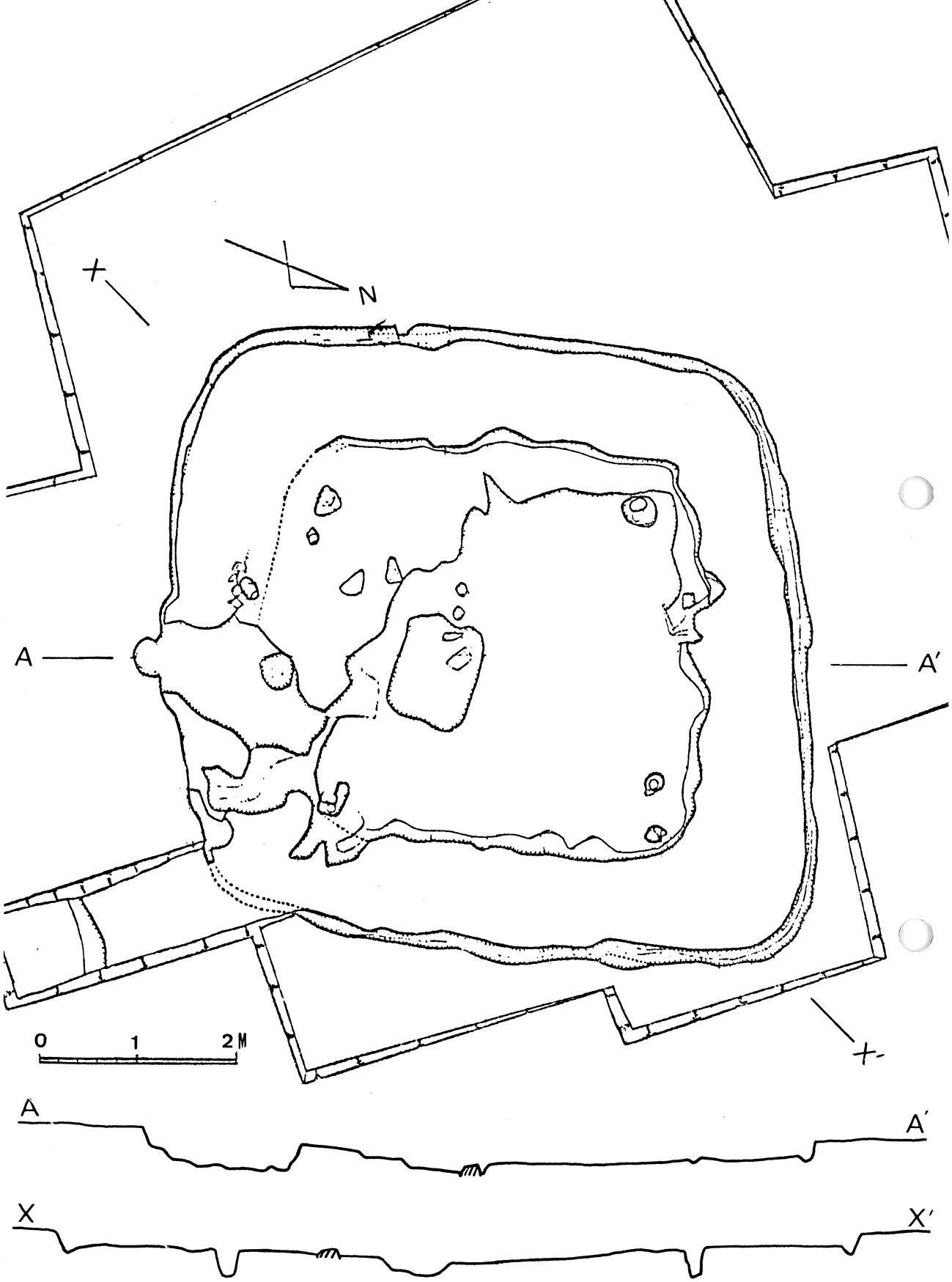
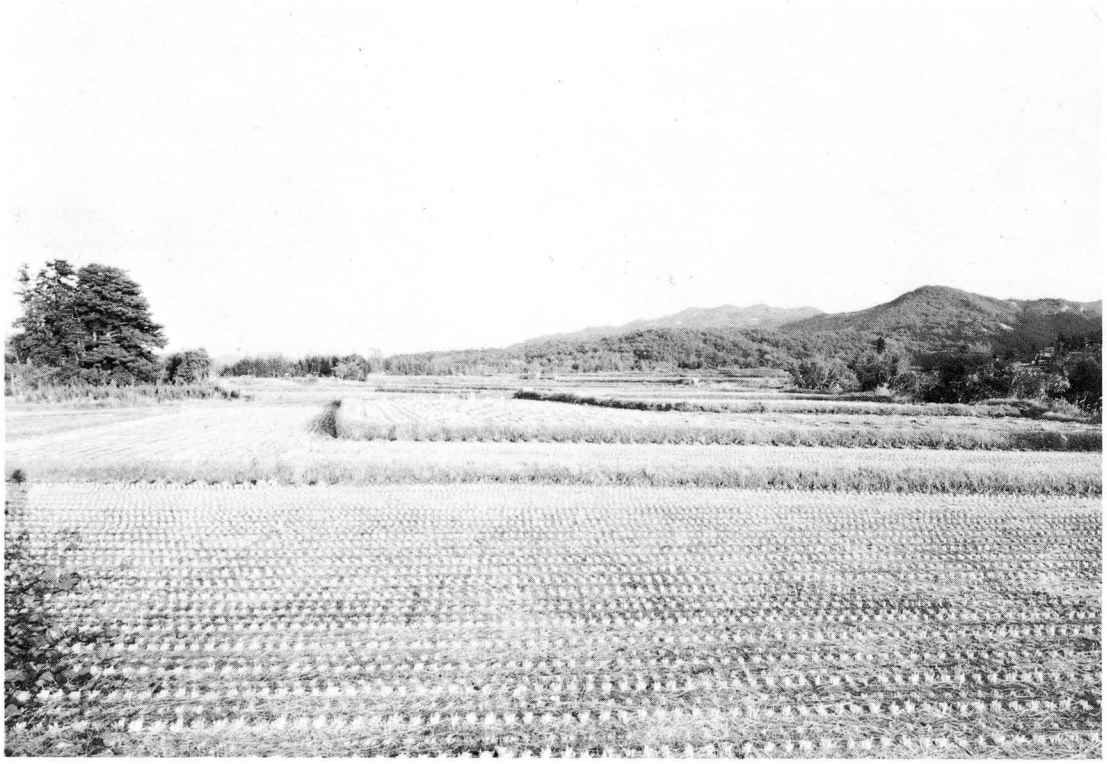


図6　Cトレンチ竪穴住居址実測図

(1) 淡河城跡遠景（南から）

(2) 淡河城跡遠景（北から）

(3)　淡河城本丸跡（西から）

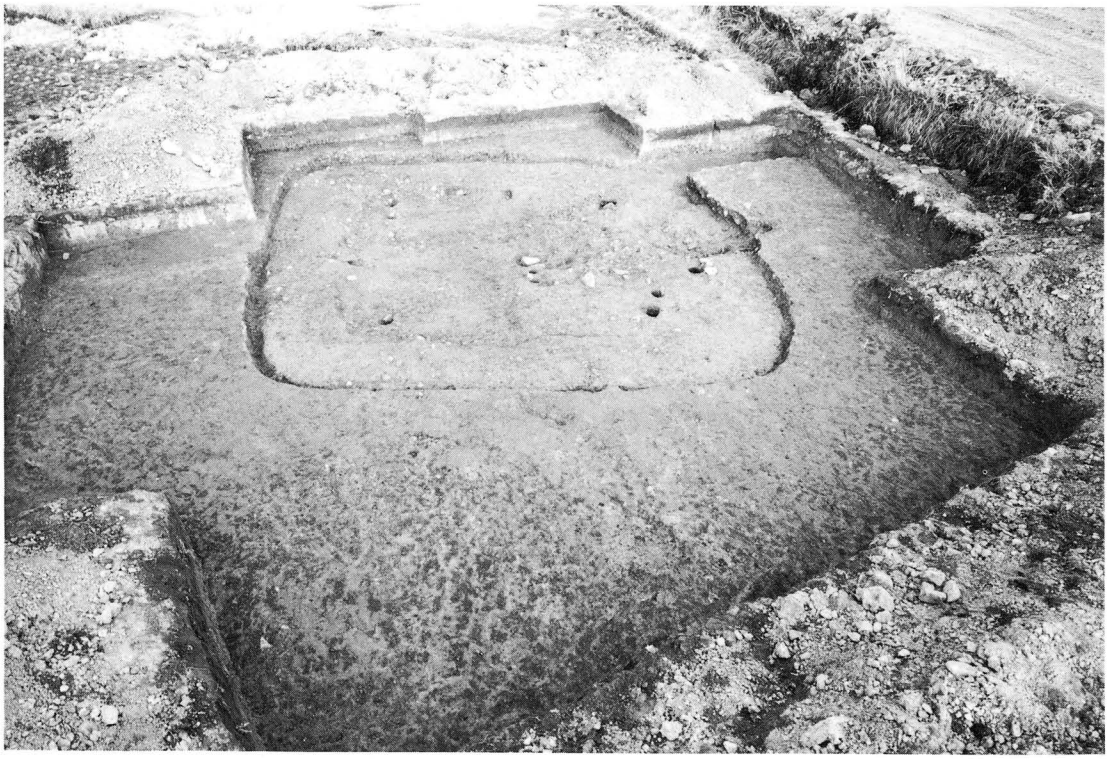


(4)　淡河城跡発掘予定地（西から）

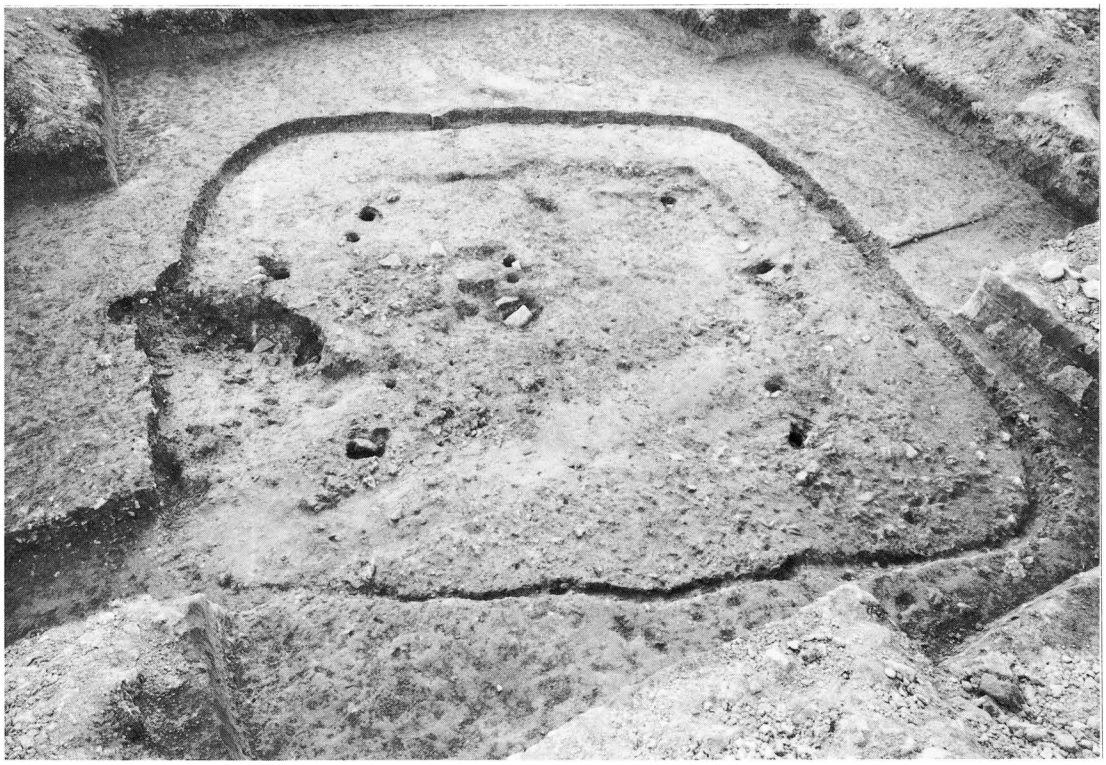
(5)　Aトレンチ（東から）

(6)　Bトレンチ（西南から）

(7)　Cトレンチ（南から）



(8)　淡河城下層・竪穴住居址（西から）



(9) 淡河城下層・竪穴住居址（東から）

(10) 近世石積（西から）

淡河城跡発掘調査概要

編集
発行　神戸市教育委員会 文化課

発行日　1977年3月

印刷　梶原出版印刷